

研究

佐伯と国木田独歩 (下)

— 中根祿胤・三の丸 —

会員 山 本 保

「欺かざるの記」の一部を掲載します。

明治二十六年

九月三十日—独歩佐伯着任

正午後伯着。午後直ぐに中根氏を訪ふ。

十月一日—独歩、大午前富永旅館校宿

午前、山名、野村、高橋等四氏未訪。

午後秋二(弟)と共に、近郊と漫歩し、高き(嵐山)に上

りて遠望すれば佐伯町眼底にあつまる。

夜少年諸氏未訪。其前、山中盛太郎氏と訪問す。

十月二日—毛利家へ着任挨拶

午後中根氏を訪ふも不在。蓋し氏と共に毛利氏を訪は

んととなり。坂本永年氏未訪。

(註) ①中根祿胤(つねたね) 鶴谷浩館経営主任、佐伯百九銀行

頭取。

②山名驥(日名ま) 後年小学校校長。

③野村一也(かずや) 後年(昭和五年)佐伯町長。

④高橋庸吉、当時鶴谷浩館生徒。

⑤岡崎誠など。

⑥山中盛太郎—毛利家総取締役、後年(明治四十一年)佐

伯町長。

⑦毛利家第十三代子爵毛利高重 鶴谷浩館経営主、当時

寝館(現在大平山池旁)が邸宅であった。

⑧坂本永年—鶴谷浩館長、佐伯百九銀行取締役。
中根祿胤、山中盛太郎、坂本永年は、毛利高重子
爵の重要なブレインの面であった。

明治二十六年十月一日、独歩の宿舍を訪れた山名驥氏
はその当時の思い出を次のように語っています。

「野村一也、高橋庸吉君等と誘ひ合せて富永旅人宿

(旅館、現在佐伯市大平山橋本酒店のとこにあり)を訪ねて戻る

と、薄汚れた二階の一間に、独歩兄弟が柳行杏一個と

校が出し左まま坐っていた。

独歩は矢野竜溪からもらった推薦状らしいものを

を出して必せて、私が国木田です。矢野先生も徳富先

生の推薦によつて当地に来るようになった者ですと云

うよう挨拶をした。

妻々が初対面の独歩を見て最も驚いたのは、その風

采がひどく貧弱に見えたことだった。木綿の紋付をそ

ろざいに着、よれた袴をつけ、ぶつきら棒や物言いと

する自分の悪い青年に對した時、教師というより書

生くずれと云つた感じがして、これが後任教師がいか

と少や失望した。前任者の久代孝次郎という人は当時

佐伯町切つて紳士然たる好男子で、廣く義塾出身、

恰幅よく年配者でした。

しばらく話すうちに、独歩は若々リカライイル(ドイツ

の字論家、著者及び著者論の著者)を讀みなさいと

しきりに言う。その時カライイルの何であるか知ら

なかつた若々々、新任教師(独歩)は余程カライイルと

いふ人の崇拜者ならぬと云うと思つた。

赴任二日目の独歩のようすを的確にとらえています。

独歩東伯の道順は次の通りです。

明治二十六年九月二十一日午後九時五十分の夜行列車で

東京新橋出発。

翌二十三日は考根の友人久保余所五郎（東京専門学校同郷生）宅を訪れ、考根城見物。

二十三日朝考根巻、正午大阪から船に乗り、二十四日薄暮御里柳井野（山口県）に帰宅。二日滞在。

二十七日夜柳井港で乗船、翌二十八日朝宇品港（広島県）着、夜宇品港巻、瀬戸内海を横切つて四国へ三津浜着。

二十九日午後三津浜港で肱川丸（四〇ト）に乗船。

翌九月三十日正午佐伯町の葛港に着きました。当時独歩は二十三才、愛弟收（二十六才）を伴つて。そして兄弟二人の佐伯生活が始まりました。日豊本線が佐伯を通過してはなかつたため（鉄道は大正五年南通）汽船で佐伯入りをしてたおけです。

故中根貞考氏はその著書「風鈴」（昭和三十三年発行）で次のように述べています。

「最近、大分大学の松本義一教授は、独歩の佐伯着任当時の痛について、丹念に詮索されて發表中であるが、その中に独歩が最初に富永旅館に泊つたのは、葛港から乗つた人力車の車夫のすすめによつたものか、おるいは佐伯着後、すくお左しの養父（中根祿胤）を訪ねているから、父の紹介によるものかも知れぬ。」と疑問を提起されている。

鶴谷孝節の美談教師の人達は、久代先生も独歩も、父から矢野先生（寛溪）にお願ひした結果であることに間違いないから、矢野先生は独歩に「佐伯に着いたら第一に中根に挨拶に行け」と言われたいものと思ふ。しかし父には旅館の世話など出来そうもないから、身まいは宅に出入りする銀行（百七銀行）の行員に世話させたいのかと想像する。

独歩の作品「鹿狩」に中根の叔父さんの名が見え、銀行の頭取とあるから、養父と指したことになるが、

お左しは父が鹿狩に行つた話など一度も耳にしたことはない。

佐伯に帰つてすぐ目につくのは城山である。城跡の小山で、山のひろがつた形が羽をひろげた鶴に似ているから鶴城というとの俗説があるが、白井（江中根貞考の生れた所）の篁城とよき対象である。

この城山は維新の際、明治政府に奉還してしまつたのを、養父が毛利家のため熊本営林局と何年ばかりかの交渉で、他は山林との交換が出来たのである。

城山は松、杉、椎などの密林で蔽われておるから、今日では毛利家は大変な財産を擁しているわけである。

岡崎誠氏（鶴谷孝節生徒）も次のような面白い出話をされたらそうです。

「先生（独歩）は通勤時和服、紋付に嘉平火袴、それに縮上靴へと云つても上まで紐で結び上げる軍靴式のものでなく、両側に黒ゴムのついた、すっぽりそのまま足を入れる深靴」とは聞いていた。

先生が所の狩獵グループの人々から鹿狩りにさせられた時、集合場所の中根祿胤の家（佐伯馬場）に来たのがこの服装であつたので、それで鹿狩りとばと云つて、皆が大笑いしたと云う話も聞いている。」

（附記）

①城山三の丸公園には、城山還原之碑がそびえ立っています。（顧問益田深先生の研究「佐伯史話」第二十八号所載）これによつて城山が毛利家へ返還された経緯を察知することができます。

碑文左の通り

慶長六年我祖 養賢公（初代忠成）就對相敵於佐伯之邑、築城於鶴谷之畔、名曰城山、興築海防百八十尺、築表見

坪拾陸町、周圍一里強、前臨市街、後負白濁、東控

離山、南側久部長瀬一帶平野、此為邑巨鎮矣。

公下世後、傳十一代二百六十餘年、至溫良公。明治

初年奉遷藤籍、山又為官有。余、繼統以爲、此山城

趾所存、墳墓所存、一朝而失之、雖日時世便然、不逮

今復之、非所以敬祖考之道。

且恐其羊劍之蹟終歸湮滅耳。乃、以明治二年九月具

狀於官、請償還。至三十四年二月、始有允准命。

嗚呼、城山一失而再得之。列祖在天之靈其喜可知也。

而余報本反始之念亦於是乎達矣。因叙其梗概以誌末

茲、銘云、

鶴谷之山、我祖所闢、鬱子蒼翠、有魏有奕、子々

孫々、宜永保有、茲建重碑、與山不朽。

明治四十四年九月 從三位子爵毛利高家撰並書

② 平田幸市先生著「佐伯觀光覽本おれこれ」(昭和四十年

年發行)より抜萃

関ヶ原の役後、徳川家康はさかん諸大名の叛封

を行ない、慶長六年毛利伊勢守高政は、日田隈城か

ら佐伯に移封されました。

同年四月、高政公は佐伯に入部、佐伯氏代々の居

城榎牟礼に入らず、塩屋の浜辺に城を築きました。

当時塩屋の浜は、蘆葦が風にそよぎ、水鳥が波に

たたよう寒村で、塩焚く小屋がわずかに点在するに

過ぎませんでした。

山上の城は、山容が舞鶴に似ているので、鶴ヶ城

といわれ、城下に家が建てられて、古んたん開けて

今日の佐伯市の母体ができました。

毛利氏の藩政は、高政を藩祖として、高成、高尚、

高重、高久、高慶、高丘、高標、高誠、高翰、高泰、

高謙など十二代約二百七十年余り続き、また高謙

公の時、明治維新及び廢藩置縣を迎えました。

明治三十八年、中根祿胤操による三の丸沿革記を

板に掲げます。(會員小野栄治氏の研究参照)

謹んで掲げ、成藩祖(高成)公の封ニ就キ給フヤ、

殿首トシテ城ヲ城山ニ構ヘ以テ号ヲ登シ令ヲ出スル

延トセラレタリ。

第三代(高成)公ニ至リ、其風雨ノ延少ナカラズ且諸

事不便ナルヲ以テ、始メテ三ノ丸ヲ茲ニ造営シ、

輿殿並ニ作爲家屋ヲ建設セラレ寛永十四年落成ス。

乃チ城山ヨリ居ヲ此ニ移シ給ヘリ。

第四代(高成)公更ニ書院広間等ヲ増築セシム事延享

七年ニ在リ。

第七代(高成)公、時大ニ修繕ヲ加ヘ、寛延元年ヨリ

翌年五月ニ成レリ。

第八代第九代(高成)公、寛永ニ公ノ時亦之ノ如シ。前

者ハ明和九年二月起工シ、後者ハ享和二年十月起

工、翌年七月竣工ス。

第十一代(高成)公ハ天保六年ヲ以テ輿殿ヲ改造シ、

又万延元年三月ヲ以テ書院居室広間等ノ改造ニ着

手シ、翌年四月ニ至リテ成ル。翌二年十一

月輿殿ヲ増築シ三年正月落成シ以テ今ニ至ル。

是三ノ丸建設沿革ノ大略ナリ。

鴻巣城址ノ事蹟ノ後ニ至リ竟ニ湮滅センコトヲ恐

レ、余ニ命ジテ之ヲ記セシム。命難ナリ。敢テ不文

ヲ願ミズ、旧記ヲ考索シ之ヲ列叙スルコト兩リ。

但文中起工竣工ノ年月日ヲ考ゲザル者ハ旧記散佚

ニ徴スベキナキヲ以テナリ。

右の沿革記によつて三の丸御殿の歴史を知ると同時に、

中根祿胤が毛利高家子爵よりいかに信頼されていたかが

うかがわれます。

佐伯城 三の丸沿革年表

| 年号 | 紀元 | 摘要 |
|------|------|---------------------------|
| 慶長一 | 一六〇六 | 養賢公(初代高政)築城 |
| 寛永一四 | 一六三七 | 長川公(三代高尚)三の丸造営 具殿を附屬家屋落成 |
| 延宝七 | 一六七九 | 竹林公(四代高室)書院を間乎増築 |
| 寶延元 | 一七四八 | 藤陵公(七代高直)三の丸大給繕着手 |
| 〃 | 二 | 五月 右落成 |
| 明和九 | 一七七二 | 寶龍公(八代高標)三月 三の丸大改修 |
| 享和二 | 一八〇二 | 寛洪公(九代高誠)十月 三の丸大改修着手 |
| 〃 | 三 | 七月 右竣工 |
| 天保六 | 一八三三 | 養雲公(十一代高恭)具殿改造 |
| 万延元 | 一八六〇 | 三月 書院居室を間乎改造着手 |
| 文久元 | 一八六一 | 四月 右落成 |
| 〃 | 二 | 十一月 具殿増築着手 |
| 〃 | 三 | 正月 右落成 |
| 明治二 | 一八六九 | 十三代毛利高謙改築奉還、城山門有とある |
| 〃 | 三二 | 城山を毛利家の私有地とするため、集本堂林向へ申請す |
| 〃 | 三四 | 城山遷原成る |
| 〃 | 三八 | 中根孫胤三の丸沿革誌作製 |
| 〃 | 四四 | 城山遷原之碑建立 |
| 昭和四五 | 一九七〇 | 三の丸御殿住吉浜移転、三の丸に文化会館着手 |
| 〃 | 四六 | 佐伯市・市制施行三十周年 |

三の丸檜門下は、次のような説明板が建てられています。

この門は、寛永十四年毛利家三代高尚が創建したもので、外観が黒い下見張りとなつてゐるため、通称黒門と呼ばれてゐる。

檜門とは石垣と石垣へ渡した檜の下が門となつてゐる真鍮の意であるが、この門は東の窓木門(現在の鳥居付近にある大門)、西南の坂下門(現在鳥居通縁付近にある門)の中間に位置し、三の丸御殿の表玄関に通ずる。創造の後、享和、天保の頃ははじめ、葎度となく改修されてゐるので、原形は明らかでないが、壁が白堊の塗りを施して、白木を多く露出していること、櫓部の左から右へ通行できるようになってゐること、また石塔とも見られる出張の設備などには、その古式的な特徴がしめられるのである。

佐伯市商工観光課

また昭和四十五年八月、三の丸藤棚近くは、佐伯市教育委員会作製の説明板が設けられました。

文化財 史跡 三の丸

城山の山頂に慶長年間、毛利高政によつて築かれた鶴屋城は、山城の不便さ故に、三代高尚の時、山麓のこゝに新たに三の丸を設けた。

時に寛永十四年(一六三七年)、以来明治維新に至る二百三十余年間、佐伯藩二万石の藩政はこゝで行われ、藩士の居住されたところである。今に残る維新の遺構檜門は、天保三年(一八三二年)築かれた。

の時に建築されたもので、石垣と共に往時の威容を
感ぶことができる。

鹿番後は、ここは国有となり、明治六年より佐伯小
学校が開設され、明治四十三年まで佐伯教育の歴史
的場所ともなつた。

しかし、明治三十四年毛利家の城山遷原（松下）と
共に、この三の丸も毛利家の私有地となつてゐる。

佐伯市はこの歴史ある三の丸を選んで、豪華荘麗な
市民文化会館を建設しようとしてゐる。それは期待
すべき文化の殿堂である。

長い間、城山のシンボルとして親しまれてきた三の丸
御殿は、佐伯文化会館敷地として使用されるため、住吉
浜に移転しました。これは船頭町区の方々の御尽力によ
るもので、見事に復元され、住吉御殿と命名されました。

昨年十一月六日、待望の文化会館の起工式かとり行な
われ、工事の植音が城山に連日こたましてゐます。本年
十月末の完成を目指して、施工は大分市佐藤組。

佐伯市制施行三十周年に当る昭和四十六年度は佐伯市
はとつては勿論、三の丸についてしまことと画期的な年
となつてゐます。

(註) 昭和十六年十一月六日、佐伯町、大倉町、八幡、西上浦合併して
佐伯市となる。

(以下、上)

二つのぬがい（余白を生かして）

○今日の、毎日の出来ごとの中から、五十年、百年の後世に向けて意義をも
つ歴史的な事柄を、明確に記述して記録にとどめよう。例えは市文化会館
の建設とか、重要港湾近海沿岸壁の建設とか
○反面古い昔ながらの風情がどんとこぼれて行く。城下町の面影、明治の姿を
まだ残している街の建物、物産をもつてゐる川べりや小海や吉井戸や生垣や
樹木、いつまでも残したい。止むを得なければ写真にとつて——（用）

研究

蟹田・揚場・そして塩浜
—西南の役にながかる闘書—

会員 安部 力

増村隆也著「佐伯郷土史」後篇、西南戦争と佐伯地方
の項に、（同書二〇八頁所載、前後省略）

五月二十五日（明治十年）午後二時賊兵三百人日
三隊に分れ一隊は城北馬場志より、一隊は切通しを經て角石より
村より番五川を渡り、一隊は切通しを經て角石より
進んで佐伯城下に何の抵抗も受けず突入り、警察署
用務所、裁判所、学校に乱入して建物を破壊し、蟹
田、揚場の海岸に歩哨線と張り、城下の首の逃避に
備へ、警官、区吏の行方を懸命に捜し求めた

翌五月廿六日午前七時、昇庁より情報を受け左城
間艦隊が大入島守後に来て小艇を下し舟候を上陸せ
しめたが、賊兵は塩浜の堤防下から射撃され、水兵
二名は死亡し、数名の負傷者を出して、辛うじて帰艦
した。之を知つた淡間艦隊砲門を開き、午前十時か
ら午後三時迄六十三発の砲撃を加へ賊軍を撃退した
翌二十七日賊兵は一度佐伯城下を引揚げ、廿一日

其の數四百余名を以て再び城下に入り、建物を破壊
し初めた。情報により六月一日再び淡間艦隊が大入島
守後に来て、午前六時から午後四時迄佐伯城下を砲
撃し、午後五時守後を去つた。この砲撃で大砲の弾
は養賢寺前、中村方面に盛んに落ち来てた。
と記されている。（この時の不発弾や弾片を拾つて保管
してゐる家もあるとの事がある。）
以下は私が右引用文に関連のある蟹田、臼坪で収録し